

## アパップのヴィヴァルディ《四季》

2006年7月20日(木) 2:00pm 紀尾井ホール

ジル・アパップ(ヴァイオリン)

ザ・カラーズ・オブ・インヴェンション

齋藤 桂

まず、率いるグループ名が、鬼オギタリスト、フランク・ザッパのバンド「ザ・マザーズ・オブ・インヴェンション」をもじったものであるのを見ただけでも、これから始まる演奏会が「普通」ではないことが分かる。ヴァイオリン、ボタン式アコーディオン、ツインバロン、コントラバス、という編成からして普通ではない。結論から言うと予想通りだった。いや、それ以上だったと言い直そう。

ふざけている。一言で言えばそうなる。

ヴィヴァルディの《四季》の各季節の間に、バルカンの民族音楽や、アイリッシュ・リール、モーツァルトやファリャ、バッハの小品など、節操のない選曲を挟むという構成なのだが、ふざけているのは構成だけではない。《四季》の演奏そのものもふざけている。

まず「春」の冒頭から口笛で合奏するというパフォーマンス。会場からは笑いが起こる。

楽器を斜に構えたり、歩き回ったりするのは当たり前。アドリブを入れ、楽章どうしをつなげ、椅子を叩き、突然別の旋律を演奏する(大阪公演では「冬」のラルゴで(六甲おろし)を演奏したと聞く)。休憩前には『となりのトトロ』の挿入曲を弾く。まさしく悪ふざけである。

しかし、ふざけてはいるが演奏は一流だ。アパップのヴァイオリンの技術は、様々な地域の奏法を習得しているだけでなく、いわゆる「クラシックな」基準で見ても滅法上手い。どれだけ複雑なパッセージでも、音色も音程も、決して荒れない。他の奏者も巧者揃いで、特にコントラバスのフィリップ・ノアレは、ジャズのランニング・ベースやソロも粹にこなすマルチな音楽性を見せた。本編の合間に設けられた各人のソロ・タイムでは、アンサンブルの時とは違ったシリアスな一面を見せていたことも記しておくべきだろう。楽器の編成も効果的で、アコーディオンが一台で弦楽合奏のような響きを演出していたのが面白い。通常の編成に比べてダイナミクスの変化には乏しいが、その分音色の多彩さで補うことを狙っているようだった。

何度も書いてしまうが、悪ふざけが過ぎる演奏会ではあった。けれど、観客皆が心底楽しんだことは否定できないだろう。僕たちは、すれてしまって、もう普通には《四季》を楽しめなくなってしまう。楽器・奏法・様式の時代考証の厳密さを競ったり、いかに独自の解釈を提示できているかに注目したり、必死で楽しむための口実を探している。もちろん、そういった方面での成果を否定するわけではないが、少し悲しい気もする。しかし、アパップの悪ふざけの後では、もう少し素直に《四季》を聴けるのではないかと。実際演奏会でも、ふと現れる至極真っ当な部分にはっと感動させられることが幾度となくあった。アパップは自らトリックスターを演じてはいるが、善意あるトリックスターなのである。もっとも、悪意も存分に持ち合わせてはいるが……。